女性教員懇話会　ニュースレター

2011 年度　第 2 号／2012 年度　第 1 号
（2012 年 10 月 5 日発行）

目次

ご挨拶　P.1
2011 年度報告　P.2
2012 年度新事務局　P.3
2011 年度研究会「リサーチ・ライフ・バランスをめぐって」報告　P.3
総長懇談会の記録　P.5
文系の OD 問題の対策についての提案　P.8
2012 年度研究会のお知らせ　P.9
事務局からのお知らせ＆女性教員懇話会について　P.10

♬♬♬

【ご挨拶】2011 年度から 2012 年度へ

2010 年度から事務局を担当させていただいておりましたが、諸般の事情により、懇話会の一部の活動が一時期ストップしている状態が生じていました。2011 年度はこれを回復して全面的な活動が取り戻せるように尽力しました。みなさまのご協力のおかげで、充実した研究会のほか、総長懇談が実現し、総会も開催することができました。厚く御礼申し上げます。他の方々がたくさん働いてくださったので、代表は楽をさせていただきました。

個別に振り返ってみますと、研究会では、世代・階層ごとのニーズの相違が改めてはっきりと示されたことが、参加者それぞれにとって勉強になりました。総長懇談は働く環境の向上につながる成果になったと思います。総会はしばらくぶりの開催でしたが、出席の方にも欠席の方にもご支援をいただき、無事に執り行うことができました。

目下、大学は財政的に非常に厳しい状況になっています。情報を交換して、要求を外に伝えていくことのできる場の存在が、男女問わず大変重要です。懇話会にも、より多くのいろいろな方が参加するようになることを祈ります。

2011 年度代表　　髙山　佳奈子（法学研究科）

高山先生の後を引き継いで 21012 年度の代表になりました。代表といっても、懇話会の活動を始めて２年目の新参者です。懇話会は半舷上陸体制を取っていて、昨年度の事務局から、岩崎奈緒子さん（附属博物館）と松下が残り、新たに、見学美根子さん（iCeMS）、吉永直子さん（農学研究科）、小泉明子さん（法学研究科）が加わりました。その後、小泉さんは、別の国立大学にテニュアの仕事が見つかり、９月からは新天地で活動されています。というわけで、現在は変則的４人体制です。

昨年度の研究会では、一昨年度に引き続き「リサーチ・ライフ・バランス」問題を取り上げましたが、この問題では、どうしても、研究と家事・育児の両立に焦点がおかれがちです。ですが、現実には、それ以前の問題、例えば、研究を優先しているうちに結婚のことを考えられないまま来てしまった、男女間のコミュニケーションがうまく取れないといった問題に悩んでいる人も少なくないようです。今年度の研究会はそこに注目しました。題して「婚学を考える」。ちょっと従来の懇話会にはなかったテーマですが、懇話会の新局面を切りひらくきっかけになればと思っています。

2012 年度代表　　松下佳代（高等教育研究開発推進センター）

◉◉◉◉◉2011 年度報告（活動報告・会計報告）◉◉◉◉◉◉

活動報告

ニュースレターの発行（10 月 5 日）、ＫＪ法を用いた研究会「リサーチ・ライフ・バランスをめぐって」（11 月 4 日）を行いました。また、総長懇談会が実現し、懇談会の場で話題になった OD 問題について、提言を行いました。今回、昨年度に引き続き、ニュースレターについては 2011 年度第 2 号と 2012 年度第 1 号の合併号として発行することになりました。

京都大学女性教員懇話会 2011 年度収支報告

収入

前年度繰越金	216,784 円
会費納入	2,500 円
内訳 47 名、昨年度分及び次年度以降分を含む	
受取利子	38 円
合計	219,322 円

支出

チラシ用紙代	1,156 円
インク代	5,800 円
コピー代	9,702 円
封入作業代	13,692 円
封筒代	3,621 円
切手代	720 円
小計	34,691 円
次年度繰越金	184,631 円
合計	219,322 円

女性教員懇話会の本年度事業の会計決算について、監査の結果、適正に執行されていると認め、報告いたします。

2012 年 3 月 5 日

会計監査　山根久代　（印影省略）

●○●2012 年度新事務局●○●○●○●○●○●○●○●○●

事務局メールアドレス：female-jimgroup@sys.bot.kyoto-u.ac.jp
代　表　：　松　下　佳　代　（高等教育研究開発推進センター　内線 3085）
会　計　：　見　学　美　根　子（物質−細胞統合システム拠点　内線 9832）
書　記　：　吉　永　直　子（農学研究科　内線 6307）
研究会　：　小　泉　明　子（法学研究科　平成 24 年８月まで）
広　報　：　岩　崎　奈　緒　子（京大総合博物館　内線 3283）

女性教員懇話会第 62 回研究会

リサーチ・ライフ・バランスをめぐって（again）
――悩める女性研究者集まれ（男性も歓迎！）――

女性研究者にとってのリサーチ･ライフ･バランスと一言で言っても、分野や立場によって抱える問題は様々です。2010 年度の研究会「リサーチ・ライフ・バランス」では、それぞれのニーズが多様であり、制度の柔軟化が求められていることが明らかになりました。また、世代による意識の相違があると感じられる場面もありましたが、その背景には、大学の定員と人件費とが削減され、男女問わず教職員の業務負担が過剰となり、とりわけ若手研究者の研究・勤務条件が悪化しているという構造的な問題があります。

そこで 2011 年度は、世代や立場によって抱えている問題の諸相をくみ上げられよう、**「KJ 法」（文殊カード法）**を使った**全員参加型**の研究会を開きました。当日は、大学院生・研究員・助教・准教授以上の四つのグループに分けて、本音で語り合える場を作りました。その概要をご報告します。

ご協力くださいました女性研究者支援センター、参加者の方々に御礼申し上げます。

日時：2011 年 11 月 4 日（金）
　　12 時～14 時

場所：総合博物館講演室

主催：女性教員懇話会
協力：京都大学女性研究者支援センター

プログラム：

12:00～12:40	趣旨説明
12:40～12:50	ＫＪ法についての説明
12:50～13:30	グループごとにディスカッション
13:30～14:00	各グループのまとめを発表

大学院生グループ

大学院生として生活を送る上での問題点として、経済的困難と子育てと学業との両立の困難が浮かび上がりました。

経済的困難に対しては､｢日本学生支援機構の返還免除制度の拡充や授業料（特に博士課程）の引下げを求める声の他、ＲＡなど、大学における雇用機会の拡大が解決策としてあげられました。

子育てをしながら大学院生を続けることの困難については､｢学生＝学業に専念｣という固定観念が強く､周囲の理解を得にくいという指摘がありました。

こうした状況の反映と思われますが、学生で結婚する勇気がない、という声もありました。

また、将来に対して、研究者としての自分の姿を描きにくいという不安や、研究と結婚・子育ての両立への不安が強いことがわかりました。前者は女性に限らない問題ですが、後者については、研究を続けるために、どのタイミングで結婚や出産をすればいいのかを悩む声や、研究と家事・育児が両立できるのかを心配する声がありました。これに関連して、育児支援の制度の拡充を求める声もありました。

より具体的なところでは、カウンセリングセンターで所属を聞かれるのがつらいとか、女性研究者支援センターの土日利用ができなくなり、「学生パパママサークル☆めんどり学部」の活動に支障をきたしているという指摘もありました。

研究員グループ

最も深刻な問題としてあがったのは、ポスドクの不安定な立場でした。具体的な声をあげてみると、「安定的なポストが得られにくく、将来の見通しをもった上での研究活動がしにくい」「（毎年の）就職先確保のストレスが大変」「慢性的な金欠（生活費、育児費、研究費）」などなど。こうした状況を反映しているのでしょう、「まわりにも複数、ストレス性の病気で参っている人がいます」「ポスドク・大学院生にストレス性の病気が多い気がします」といった指摘があり、その解決策として、「非常勤や有期ポストにも福利厚生つけてほしい！」「休業（育・介・病）・失業への何らかの備え（救済策）を希望します」といった切実な声があがっていました。任期制のポストすらほとんど存在しない、文系のポスト不足も深刻です。

他には、時間外の仕事が多いことへの不満や、職に就くためには論文を書く必要があるのに、家事・子育て、あるいは、就職活動や非常勤の仕事で十分な時間がとれない、といった声や、女性研究者への支援が家族をもった人に偏っているのではないかという指摘もありました。

助教グループ

最も多かったのは、職場のコミュニケーション不足を指摘する声でした。上下の関係に限らず、教員と職員の間、男女間など、さまざまな関係において問題点が指摘されていました。

また、女性の教員が少ないことに、居心地の悪さを感じる声が多くありました。これに関連して、気楽に横になって休める休憩室がほしい、という要望や、代わりがきかない仕事内容であるため、産休がとりにくい、といった悩みがあげられました。

准教授以上グループ

子育て以外に介護の問題が出てきたのが特徴的でした。いずれの場合でも、仕事との両立を不安視するものです。また、定員削減、資金獲得のためなど、さまざまな事情により、研究以外の雑用が多すぎるという声が強くあがりました

紙幅の関係で、すべての意見をここで紹介することはできませんでしたが、参加者のご協力により、有意義な研究会となりました。

ポスドクの立場にある女性研究者たちの置かれた深刻な状況が浮き彫りになったことは印象的でした。社会問題として注目されるポスドク問題。本学もその例外ではなく、対策が求められます。

2012 年 2 月 24 日（金）

総長懇談会を行いました。

出席者

【総長側】

松本紘総長、塩田浩平理事、
稲葉カヨ理事補・女性研究者支援センター長、
山本克己理事補

【女性教員懇話会】

髙山佳奈子、船曳康子、落合久美子、松下佳代、岩崎奈緒子

１　若手支援について

懇話会：総長にも出席していただいた 2010 年 12 月 3 日の研究会「リサーチ・ライフ・バランスをめぐって」では、総長ご退席後のディスカッションの中で、女性研究者の間でも世代や専門の相違によってニーズや考え方に大きな差のあることが明らかになった。そこで、2011 年 11 月 4 日には「リサーチ・ライフ・バランスをめぐって again」と題する研究会を行い、全員が意見を言えるようにして階層ごとに要請をまとめる方法を試み、一定の成果を上げることができた。とりわけ深刻なのは文系の研究員の層であり、生活の保障がなく困窮している人も少なくない。

総長：文学・教育系では、同じ文系でも経済・法に比べると研究テーマが細かく分かれていることが多い。それぞれがみな専門家で比較がしにくく、平等な人事を確保しにくい。ポストを得るチャンスの少ないことは男性も同様だろう。女性に特有の問題はあるか。

懇話会：11 月の研究会では参加者を「准教授以上」「助教」「研究員（PD・OD 層）」「大学院生」の 4 グループに分けた。研究員の層では女性も男性も苦しい。理系は PD ポストがまだ相対的に多いが、文学系では少なく、PD・OD の数があまりに多くて研究を続けられない生活環境の人も少なくない。ポジションがないと図書館も利用できないので、非常勤講師としての雇用を図っている。この点は男女に関係なく、研究のできる身分を保障することが目的である。

総長：大学の研究者として受け入れるという考え方は重要。大学のファシリティを利用できるよう電子 ID を統一化して考え、生活保障につなげることが考えられる。ただし、非常勤講師は全国的に削減する方向になっており、たとえば阪大は旧大阪外大の部門以外では廃止となっている。

懇話会：現在のところ非常勤ポストで対応するしかない。

稲葉理事補：他大学の例を見ると非常勤講師の数は文系が多い。みなどうやって就職しているのか。

懇話会：自分の研究分野に合わなくても応募している。1 つのポストに 40～50 倍の応募がある。

稲葉理事補：倍率でいえば理系も数十倍あろう。

懇話会：院生の不安定さの点からすると、子どもをいつ産むか、いつ結婚するかは難しい問題である。

総長：女性が研究室に残るのはバリアの高いことだといえる。

２　職場環境の改善について

稲葉理事補：理系の女性のほうが既婚率の高いのはなぜか。

懇話会：職場に男性が多いので相手を見つけやすいのかもしれないが、研究と家庭との両立は理系でむしろ難しく、男性ばかりの職場で浮いてしまう状況にもある。相談できる女性の上司もいないことがほとんどで、理解が得にくい。

総長：乳児を 2～3 時間預けるというだけでも送り迎えの時間がかかってしまう。未婚でないと働ける時間を確保しにくい。

稲葉理事補：女性研究者支援センターが先日実施した「女子高生車座フォーラム」では、高校の先生から「家事の分担できる男性と結婚しなさい」と言われたとの話もあった。

総長：出産・育児では男性に分担できないこともある。具体的にどのようなことを提案したいか。昔よりは少しずつ改善している面もある。どの程度を目指すか。

懇話会：ルールづくりとして、突発的に生じうる問題に対処するため、サポートする人にいてほしい。周囲の理解もまだ不十分である。

総長：抽象的に意識改革を訴えるだけでは、かえって反発を生んでしまうおそれもある。具体的に声を上げる必要があるだろう。

懇話会：プロジェクトで任期付きの職にある人は、短期間で成果を上げることを求められるため、出産が困難。成果報告のできる期間を延長するなどの措置を設けるべき。

総長：補助金における評価にかかわる問題であり、京大ではなくて、国全体で必要な措置である。

塩田理事：問題が発生したときにサポートする学生を雇うシステムも有用だろう。

総長：学生では代替できない部分もある。補佐員の雇用にもコストがかかるので、プログラムの提案が必要である。助教や研究員ならひとり年間 400～500 万はかかり、非常勤職員でも 300 万円ぐらいかかる。100 人なら 3 億円となる。大学の間接経費は約 30 億円で、その 1 割を使うのは簡単でない。外から資金を得るか、内部から使うか、いずれにしてもコンセンサスも得る必要があり、ある程度の時間がかかるだろう。懇話会のようなところから提案を上げてほしい。大学としても努力はしているが予算がなかなかなく、人事は結局競争なので、不利になってしまう人が出ている。

懇話会：先日の研究会では、出産後すぐに無理に復帰したため体を壊してしまった例が報告された。

塩田理事：本人しかできない仕事だとそういう事態が出てきうる。

懇話会：他人と一緒にする仕事ではさらに融通のきかないところがある。医学系は深刻である。

総長：もっと大胆な社会改革はできないものか。たとえば、女性は平均して男性より 10 歳長生きだから、育児をしていた期間の分、引退を 10 年シフトさせるとか。両方を一度にやろうとするから無理が生じているところもあるのではないか。

懇話会：女性で年配でも元気に研究に従事している人は多く、定年の延長ができれば望ましいと思うケースもある。65 歳の女性にボランティアで来てもらっている例がある。

稲葉理事補：今は雇用形態がフレキシブルになっている。非常勤ならば雇用できる可能性もある。

総長：諸外国では、年齢による差別は廃止される傾向にある。日本でこれが進まないのは、年長者が権威をふりかざすので世代交代がしにくいためということがある。健康面からすれば 10 歳延ばしても支障はない。

懇話会：司法試験など、年齢にかかわらず受けられる試験に合格しても、年齢が高いと就職できないと聞くこともある。

山本理事補：採用する側に問題がある。ただ、著名な法律事務所の勤務条件は極めて苛酷であり、それに耐える体力のある人でないと務まらないのが現状である。

懇話会：繰り返し啓発のメッセージを発し続けることが必要なのではないか。

総長：男性も同じように大変なところもあるので、概念的に議論してもなかなか前に行かない。京大では特に、理工系の女性教員の増加が進んでいないという問題がある。

懇話会：理解を得るという点では、まず第 1 子の出産・育児が最も大変だと思う。

３　女性研究者支援センターの利用について

総長：朱い実保育園、風の子保育園は大学の施設ではないので、直接に対応させることは難しい。

稲葉理事補：今風の子保育園は利用者の約 40%が京大病院関係者、朱い実保育園は約 20%が京大関係者と聞いている。

懇話会：風の子保育園では、0 歳児の受け入れが難しく、そこを埋めるのが女性研究者支援センターだが、入園待機乳児を 9 月以前に受け入れてい

ただくことはできないか。さらに、現在は年度末に 15 か月未満である予定の乳児しか受け入れられないが、留学などで京大に来た直後の人については、年度末に15か月を超える場合であっても、15 か月になるまでの期間は乳児の保育をしてほしい。またセンターは人手不足だと感じる。

稲葉理事補：女性が甘えている場合もある。センターでは受入可能人数を今年 9 人から 12 人に増加させた。子ども 3 人に対して 1 人以上保育士をつける必要があるので、外部に派遣を依頼している。10 人目の受入希望があるともう 1 人保育士を手配することになるが、突然キャンセルされた例もある。こうなるとセンター職員の側でも受入れをいやがることになる。

総長：コストがかかっているという意識が欠けている。誰かがやってくれると思っているところがある。自分たちが集団として一緒になって取り組むという考えが女性側にも必要だろう。

懇話会：センターは土日の利用ができなくなって不便であるとの意見も寄せられているが、復活できないか。

総長：予算がないという問題がある。精神論では解決しないので、どこから費用を出すかという具体的な方策がなければ動かない。そもそも職場の「雰囲気づくり」とは何なのか。

懇話会：女性の少ない部局などでの女性差別がなくなるよう、大学としてもはたらきかけてほしい。

塩田理事：職員研修や入学時ガイダンスなどで啓発を実施しているのにもかかわらず、理解しがたい案件が発生している。どうしようもないという感じがする。

総長：事実関係に争いのあるケースが起こっている。最終的には司法的解決しかない場合も考えられる。

山本理事補：部局で講習を実施するとなると、個人的関係が問題になりうるので、大学全体で一般的な取組みを行うほうがよい面もある。

稲葉理事補：センターでは、女性に対する研修として、女性が少ない職場でも意見を言えるようになるための自己主張トレーニングを実施している。こういった講習にももっと参加してほしい。現状ではあまり来ていない。

懇話会：現実には、ひとりで自己主張しても浮いてしまうことが多い。たとえ精神論であっても、大学として口を酸っぱくして言ってくださるのがありがたい。

総長：いろいろな研修が実施されているが、人が集まらないので各部局から参加者を出すように割り当て制になっている。もともと意識の高い人しか来ていない。

懇話会：ハラスメントで厳しい制裁の対象となった例を紹介して自覚を促すのはどうか。

山本理事補：モデルとなった個人が特定されないようにするのが難しい。

総長：ハラスメントのケースでは訴えるほうに問題のある場合もある。現在、大学の予算・人員の削減のため、有効な取組みのできる体制になっていない。大学全体でやらないと動かないということは実感している。事務職員は外国の大学よりは少ないが、減ったといっても私大よりは多い。現在は部局ごとの利益の追求だけが目指されており、ポストの配分などと同様、女性の問題は全体で取り組む必要があるにもかかわらず、部局でなく全学の問題となった途端に部局からの協力を得にくくなる。しかし、ローカルではなくグローバルな最善化の議論が必要だろう。

懇話会：ありがとうございました。

総長懇談会後の動き

懇談会の際、塩田理事より若手支援の問題について提案があるなら提出するよう示唆をいただきました。事務局で後掲のように提案をとりまとめ、提出しました。また、待機児の受入の前倒しの問題に対して、女性研究者支援センターでは前向きな検討を進められました。

京都大学理事（総務・人事担当）
塩田　浩平　様

2012 年 3 月 3 日

文系の OD 問題の対策についての提案

文系の OD 問題は深刻です。他大学での非常勤講師や予備校講師等のアルバイトで生計を立てながらチャンスを待つというのが一般的ですが、就職するまでの期間、文系の学生にとって、京都大学の図書（オンラインデータベースを含む）を利用できる身分をいかに確保するのかは、キャリアを継続する上で死活問題です。

文系の OD がプロジェクト型の研究費等で雇い上げられるような幸運はめったになく、多くの場合、研修員・科目等履修生・聴講生などによって、上記の身分を確保しているのが現状です。研修員の場合、84,600 円の入学料に加え、月額 29,700 円の研修料が必要となり、また、科目等履修生や聴講生の場合は入学料 28,200 円、1 単位 14,800 円の費用が必要となります。生活そのものが厳しい中での諸費用の負担は OD に重くのしかかります。

そこで、京都大学の博士後期課程修了者（研究指導認定退学者を含む）に対しては、一定期間を区切って（例えば５年間）、研修員の入学料・研修料や科目等履修生・聴講生の入学料・履修料等の費用を免除するなどの手当を講ずることにより、博士後期課程において研鑽を積んだ OD への経済的な救済が行われるよう提案します。

さらに踏み込んだ OD 救済策として、現在、例えば文学研究科においては、博士課程修了者に非常勤講師枠を与えて身分を確保し、あわせて大学教員準備教育を行うという取組も実施されています。非常勤講師を削減するという本学の基本方針は承知していますが、文系 OD の救済という目的の下の特例として、こうした取組がさらに広がっていくよう奨励されることを要望します。

以上では文系 OD に限定して書きましたが、理系でも専門分野によっては文系と同様の問題を抱えているところがあるようです。そういった分野の OD に対しては文系 OD と同様の対策が有効であると考えられます。その意味で、上記の救済策が講じられるときは、文系 OD に限定されることのないようお願いいたします。

京都大学女性教員懇話会事務局
高山佳奈子・松下佳代

2012 年度研究会のお知らせ

女性教員懇話会第 63 回研究会

「婚学」を考える

一昨年・昨年度は、研究と生活全般に関する女性研究者のニーズをできるだけ幅広く汲み上げるテーマでしたが、今年度は思い切って「婚学」に焦点を当てます。

婚学といっても、対象は未婚の方に限りません。既婚の方も含む様々な立場の大学教員にとって、結婚にまつわる昨今の社会的関心は他人事ではありません。九州大学の佐藤剛史先生をお迎えして、研究者ならではの視点で「婚学」について考えてみたいと思います。

■ 日時：　2012 年 11 月 28 日（水）12～14 時
■ 場所：　総合博物館 3 階

主催：女性教員懇話会　　協力：京都大学女性研究者支援センター

婚学って ??

「婚学」とは、結婚やコミュニケーションについての学問で、２０１２年４月に九州大学で初めて授業が開講されました。結婚のための活動が「婚活」としてビジネスになる時代、結婚するためのノウハウや煽り文句が様々なメディアを通じて氾濫しています。その一方で、現実には離婚率の増加や晩婚化、生涯未婚率の上昇など、経済的・社会的な問題が注目されるようになってきました。結婚するもしないも人それぞれという意見もあれば、個人の問題では済まないという意見もあり、結婚に対する価値観は、一方的な考えを押しつけあっては無駄に摩擦を生んでしまうデリケートな問題になりつつあります。

この問題を多元的・客観的に論じることは難しいですが、チャレンジングな試みとも言えそうです。興味の有無に関わらず多くの人にとって身近な問題であり、問題を掘り下げ現状に理解を深めることは研究者の本分。であればこそ、大学教員の生活と結婚に焦点を絞ることでより具体的で有意義な議論ができると思います。

九州大学農学研究院助教　佐藤剛史先生のプロフィール

経歴
2002-2003 年　日本学術振興会特別研究員
2003 年-　九州大学大学院農学研究院助手
学歴
-2001 年　九州大学 生物資源環境科学研究科 農政経済学専攻
-1998 年　福岡教育大学 教育学研究科 社会科教育専攻
-1996 年　福岡教育大学 教育学部 中学校教員養成課程社会科

九州大学研究者情報
http://hyoka.ofc.kyushu-u.ac.jp/search/details/K001662/

お願い：「女性教員懇話会ニュースレター」をもっと多くの女性研究者へ！

京大で働く女性教員・研究者の数が増加し、就業形態も多様化するにしたがって、
「女性教員懇話会ニュースレター」をお届けできていない方が増えています。

お近くにまだ受け取っておられない方がおられましたら、ぜひ、メールアドレスをお知らせください。

転送大歓迎です。ご協力のほど、どうぞよろしく！

今年度は、紙媒体とメールによるＰＤＦ配信により、ニュースレターをお届けしましたが、

徐々に紙媒体を廃止し、メール配信に切り替えていく方針です。メールが届いていない方は、アドレスをお知らせください。

事務局からのお願いとお知らせ

◎ **年会費（各年度 500 円）の納入、どうぞよろしくお願いします。**

郵便振替でお願いします。

口座番号：01010-9-3258　名義：京都大学女性教員懇話会

今年度以降分の会費を既に納入済の方には、宛名ラベル下部の数字で納入済年度をお知らせしています。

◎ **ニュースレター配信用のメールアドレスを登録してください。変更もお知らせください。**

迅速性、経費節約、事務局の省力化、すべての面でメールによる配信が合理的です。

ご連絡はメールでお願いします。

事務局メールアドレス：female-jimgroup@sys.bot.kyoto-u.ac.jp

全会員宛てのメールアドレス：female-ukyoto@sys.bot.kyoto-u.ac.jp

女性教員懇話会とは？

女性教員懇話会は、①京都大学に在籍する女性教員相互の親睦と交流、②各自が当面する諸問題についての情報の交換、③女性研究者の地位の向上と差別の撤廃を目的とする自主的な組織です。京都大学に在籍するすべての女性教員（助手・助教・講師・准教授・教授）および医員・技術職員・教務職員・非常勤講師・元教員を潜在的な会員として想定し、ニュースレターをお送りしております。当会は 1981 年に「女性教官懇話会」として発足して以来、女性教官の実態調査の実施と報告書の提出、セクシュアル・ハラスメント事件について事実の解明と性差別を撤廃するための委員会の設置などを求める「要望書」の提出、『女性教員・卒業生からみた京都大学――研究・教育環境調査から――』の刊行など、様々な活動を行ってきました。1982 年以降は、毎年定例化して総長との会見を行っています。また、創立以来、研究会（年 2 回）などの実施により、専門分野を超えた交流と親睦の充実に力を入れてきました。法人化により「教官」という身分がなくなったことを受けて、2006 年 1 月 18 日に名称を「女性教官懇話会」から「女性教員懇話会」に変更いたしました。

当会の一番の魅力は、日頃は触れることのない遠く離れた分野の研究の状況を垣間見ることができる点にあります。会員の思想・信条の自由を尊重し、会として政治的活動をすることはありません。女性同士で“楽しくお喋り”をする機会として、是非お気軽にご参加ください。

女性教員懇話会事務局（2012 年度）

松下佳代（代表）・見学美根子（会計）・吉永直子（書記）・小泉明子（研究会、2012 年 8 月まで）・岩崎奈緒子（広報）

連絡先　〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町　京都大学高等教育研究開発推進センター　松下佳代気付

女性教員懇話会事務局

Email: female-jimgroup@sys.bot.kyoto-u.ac.jp